

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23320137

研究課題名(和文) 古代都城・都市をめぐる環境論

研究課題名(英文) Ancient Capital and City's Environment in Japan

研究代表者

館野 和己 (TATENO, KAZUMI)

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：70171725

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,400,000円、(間接経費) 3,420,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本古代の都城・都市研究を環境という視点を入れることで深化させることを目指した。その結果、周囲の山・川が都城や大宰府などの選地にあって重要な意味を持ったこと、都城内の清浄や、都城を取り囲む山容の維持が図られたが、いずれも礼に関わるものと位置づけられていたことが明らかになった。また都城の選地にあっては、周辺の山・川などが風水思想によって解釈されたとの説があるが、そうではないと考えられるに至った。なお資料編と論考編からなる成果報告書を作成した。

研究成果の概要(英文)：The aim of our research is to deepen the understanding of Japanese ancient capitals and cities from environmental viewpoint. As a result, we came to the following conclusions. The first was that mountains and rivers used to be primary factors in deciding the location of the capitals, Dazaifu and other cities. Secondly, we clarified that after the constructions of capitals, out of the necessity of Li, attempted to keep the spiritual purity of the capitals and the shape of mountains surrounding the capitals. Thirdly, through the re-examination of historical records, we came to deny a common view that when the government selected the location of the new capitals, they tended to apply the Feng sui system to the surrounding mountains and rivers. To make our conclusions known to the public, we published a report in two volumes; one gathers historical documents and the other is a collection of research papers.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：古代都城 古代都市 環境論

1. 研究開始当初の背景

現代における環境破壊・改変・汚染や大規模災害の影響などの社会的状況を踏まえて、環境という視点から古代都城・都市研究を深めようとしたものである。

2. 研究の目的

日本古代の都城・都市研究を、環境という視点を導入することで深化させることが目的である。都城や大宰府・国府などの古代都市建設にあたっては、自然環境が選地の重要な要因となった。しかしそれにとどまらず、平城遷都の詔が「平城の地は、四禽図に叶い、三山鎮めをなす」と述べるように、自然環境は思想的に翻訳し直された。したがって都城・都市の自然環境自体に加え、環境に対する思想、環境のとらえ方、それによる素朴な自然観からの転換・翻訳の様相を解明することを目的とした。さらに都城・都市の成立による自然環境の改変、新たに生まれた都市環境とその影響を追究することもめざした。

3. 研究の方法

本研究は、歴史学・考古学・地理学・国文学の研究者が共同してあたるものである。

歴史学・国文学は、多彩な文献史料・文学作品から、環境に関わるデータを引き出し、それに対する古代人の思想に迫る。考古学は、遺跡から開発の様相を明らかにすると共に、動植物遺体や土壌分析などから環境の復元をめざす。地理学は、地形・立地などの復元とともに、本学 21 世紀 COE プログラム「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」(2004～2008 年度)で作成し、本学古代学学術研究センターHPで公開しているGISを用いた「奈良盆地歴史地理データベース」を活用し、そのいっそうの発展・充実をめざす。そして4分野が連携して、都城・都市をめぐる環境論を立体的に研究することをめざした。

4. 研究成果

具体的には次のような成果を得られた。

(1) 古代都城・都市の環境論研究を進めるのに必要なデータを収集した。歴史学・国文学分野では、『古事記』『日本書紀』『続日本紀』『延喜式』『類聚三代格』『万葉集』『風土記』などの文献史料から、本研究にとって必要とみられる山野河川などの自然環境、開発、亢旱・水害・地震などの災害とそれに関わる信仰、動植物に関係する史料、それに古代人の環境観を示す史料を集成した。ただし史料は地域に限らず網羅することにした。

『日本書紀』『続日本紀』については、抽出した記事に網文を付けた資料を作成し、『万葉集』では、環境を構成する重要な要素である山岳と河川に注目して、関係歌を集成し、その地名に注を付した資料を作成した。

また環境に関する信仰を明らかにするための資料として、『延喜式』に見える奈良盆地の式内社について、社格・関係史料・所在地・祭神などを整理し、それに備考を付した。さらに諸国からの貢進物は環境への働きかけの成果を示すものであるため、『延喜式』

に規定する諸国貢進物の一覧を作成した。これらの資料は後述する成果(10)に収録した。

考古学・地理学分野では、藤原京の遺構情報をGISデータベース化する事業を進めるべく、データ入力を行い、また平城京で見つかった動物遺体例や『日本霊異記』に見える動物関係記事を収集した。さらに奈良盆地の堆積層分析のほか、平城京の道路側溝の珪藻分析なども行い、平城京とその周辺部における水環境の一端を明らかにした。このうち藤原京遺構データベースは、先の延喜式内社データベースと共に、本学の古代学学術研究センターの奈良盆地歴史地理データベース作成作業の一環をなし、将来的にHP上で公開する予定である。また『日本霊異記』の動物関係記事は、成果(10)に掲載した。

(2) (1)の史・資料を元に、古代人が古代都城を取り囲む自然環境をどう捉え、またどう理解・解釈していたかを考察した。まずは自然環境の分析としては、具体的な遺構・地勢などに基づいて都城の立地環境について、その地形環境や人文・交通環境を検討した。

一方、都城に関する自然観を示す文献記事からは、特に山・川との関係が重視されたことが明らかになった。すなわち山・川が都城の選地に重要な意味を持っていたのである。そもそも初代天皇とされる神武天皇は、畝傍山の東南の橿原の地に宮を造り即位したと伝えられ、崇神・垂仁など、三輪山の西や南の麓に宮を築いたとされる天皇は多い。

都城段階になると、藤原京では香具山・畝傍山・耳成山のいわゆる大和三山や吉野山が藤原宮を取り囲むように位置していたことが、選地に大きな意味を持った(「藤原宮の御井の歌」『万葉集』巻1-52)。また飛鳥川などの河川も重要だった。文武2(698)年5月や慶雲3(706)年6月に、京・畿内で名山大山に対して祈雨したが、時の京は藤原京である。同京では京内の三山や飛鳥川などが祈雨の対象になったのであり、それらが信仰上、重要な位置を占めていたことがうかがえる。そして「山川も依りて仕ふる 神の御代かも」(『万葉集』巻1-38)のように、天皇は都城周辺の山と川の神の奉仕を受けていると認識されていた。

それに対し平城京では、和銅元(708)年2月の平城遷都の詔の中で、その地が「三山鎮めをなし」(『続日本紀』同月戊寅条)ていると、大和三山を意識した表現がされている。しかし三山は京内に位置していず、また京内の名山大川に祈雨することもなかったので、山・川の環境あるいは環境に対する意識は藤原京とは異なっていたことがうかがえる。

平安京では、平安宮の地は「山川も麗しく」(『日本紀略』延暦13(794)年10月丁卯条)とか、「此の国、山河襟帯して、自然に城をなす」(『同』延暦13年11月丁丑条)と言われていることは、山・川と都城の関係を直接的に語るものである。

次に都城環境の思想的捉え方については、まずは都城内の環境を清浄に保つとともに、先述のように重視された周囲の山の景観を保全しようとしていたことがわかった。前者は都城内における埋葬の禁止（喪葬令皇都条）や、『延喜式』左右京職に見える京内の清掃規定などがそのことを物語る。そして重要なことは、都城の清浄が礼に関わることと認識されていたことである（『続日本紀』慶雲3(706)年3月丁巳条）。

一方後者の周囲の山の景観については、天武5(676)年5月に、南淵山・細川山で草刈りや伐木を禁じたのは（『日本書紀』同月是月条）、飛鳥浄御原宮からの景観を意識したものであろうし、延暦17(798)年12月8日太政官符（『類聚三代格』）で、京城側近の高頭の山野を衛府に守らせ、また行幸時に望まれる山岡の樹木伐採を禁じていることも、同様の意味を持つ。そして「山岳の体、或いは国において礼たり」（『類聚三代格』大同元(806)年閏6月8日太政官符）からは、山容が礼に関わるものと捉えられていたことがわかる。

このように都城内の清浄を保つとともに、都城を取り囲む山を美しい状態に維持することが、いずれも礼に関わるものとして思想的に捉えられ、必須のこととなったのである。

次に都城においては、その中軸線が重視された。すなわち朱雀大路である。藤原京では都城の形態と自然地形の制約のために、朱雀大路を十分に確保することができなかったが、平城京では平城宮をその中央北端に置くことで、十分な長さを持つ確保した。それは奈良盆地を南北に貫通する下ツ道と重なるものだったから、朱雀大路は京内にとどまらず、国土を貫く中心軸となった。そしてその宮内への延長上に大極殿・高御座という天皇の座を置くことにより、天皇が全土を支配するにふさわしい位置を占めることとなり、かつ大極殿と天帝の居所である太極（北極星）との繋がりがより明確になった。

この中軸線の重視は、中国都城に倣ったものであり、唐・長安城や南朝の建康城などの現地調査で、それを確認することができた。前者では中軸線の南延長上に子午谷が、後者では中軸線の北延長上に九華山が位置し、それらが設定の基準点になったとみられる。

都城の環境の捉え方・思想については、もう一つ重要な問題がある。風水思想との関係である。平城遷都の詔には平城の地を選んだ理由として、先述の三山以外に「四禽図に叶い」という文言が見える。これについては阿倍晴明撰と伝える『篋篋内伝』にしたがって、四禽（四神）は東西南北における川・池・道・山の存在を意味し、それらが揃った平城の地は四神思想・風水思想によって選ばれたものとの説がある。これによれば自然環境を風水思想で翻訳直して、平城は都城にふさわしい場となれたことを示すものであり、その意味することを探ることは本研究にとって大きな研究課題であった。しかしその一方、平安

遷都に関わる詔には同様の文言は見えないことから、それらは同京の選地思想としては用いられなかったとも言われてきた。

そこで選地関係の史料を調べると、天武朝の都城の地の選定や長岡京の選地には陰陽師が関わったが、彼らの職掌は風水ではなく、卜占によって神の意志を聞くことであった。

また平城遷都の詔は、隋の高祖による新都創建詔を範にして作成されたものだが、後者には「四禽叶図」のような文言は見えない。そのかわり「龍首山川原秀麗、卉物滋阜、ト食相土、宜建都邑」と、優れた自然と占いの結果が建都の理由とされている（『隋書』文帝本紀・開皇2(582)年6月丙申条）。

一方、ベトナム李朝の大羅城（昇龍城）への遷都の詔にも「天地区域の中におり、龍蟠虎踞の勢を得」という、「四禽叶図」に類似する文言が見える（『大越史記全書』順天元(1010)年2月条）。しかし一方では、「江山向背の宜」とか「其の地広くして坦平、厥（そ）の土高くして爽塏」というように、そこが平坦で高燥、川や山の具合がよいという、現実の地勢の良さを示す文言も見える。したがって、龍蟠や虎踞は具体的にどのような地勢を意味するのかという問いを立てても、あまり意味はなく、その地勢や交通条件などを総合して選ばれた大羅城の地の良さを、「龍蟠虎踞の勢」と表現したに過ぎないであろう。

したがって「四禽叶図」との文言は、平城京の地が四神思想・風水思想に基づいて選ばれたことを意味するものではなく、具体的な地勢の良さ（すなわち広大で平坦な面積の確保、交通の便、防禦の便など）をそう表現したにすぎないと考えられるに至った。

なお2013年12月に行った都城制研究集会の国際シンポで、上記の見解を示したところ、中国・韓国人研究者を含め、日本・中国・韓国・ベトナムの古代都城の地は風水思想で決められたのではないという点で、意見の一致を見たところである。

(3) 都城の宗教的環境という点では、寺社の問題も考え、仏教・寺院が都城を荘厳し、王権を擁護する役割を果たしたのに対し、神社は基本的に京内に置かれなかったことを改めて確認した。ただし、太詔戸社のように、遷都に伴って都城を移動した神社の存在が知られ、より考察を深める必要がある。

(4) 災害と都城についても考察を行い、地震・旱害・疫病などを、至らぬ政治に対する天からの警告と捉える天人相関思想の影響を確認できた。特に聖武天皇が遷都を繰り返した背後には天平年間の度重なる災異があり、とりわけ紫香楽宮から平城京への遷都は、連日の群発地震によるものと考えた。

(5) 都城との比較研究を行うために、古代都市の立地環境についても注目し、平泉・大宰府や尾張・武蔵・加賀・能登・越中・出雲・

肥前などの国府遺跡や、城柵・山城遺跡などの現地調査を行った。大宰府は四王寺山の南裾の平地に位置し、出雲国府は『出雲国風土記』（意宇郡）に神名備野と記され、神聖視された茶臼山の南側にあたるなど、山との関係で都城との共通性を見ることができる。

(6) GIS を用いたデータベース構築の関係では、次のようなことを行った。(1)で述べた大和国延喜式内社データベース関係では、所在地情報（住所表記・緯度経度）を入力した。これは将来的に、より充実させて本学古代学学術研究センターの Web サイト上で、WebGIS データベースとして公開する計画である。次にやはり(1)で触れた藤原京遺構データベースも、上記センターで制作・公開する計画で、そのために情報を追加入力した。さらに、国土地理院提供の基盤地図情報と ArcGIS を使用して、飛鳥・藤原京周辺の地形モデルを作成して、飛鳥浄御原宮からの可視領域分析を行った。これは(2)で述べた、同宮からの南淵山・細川山の眺望を復元しようとしたものである。

(7) 日本の都城を東アジア諸国と比較研究するために、中国・韓国・ベトナムで現地調査を行った。中国は 2011 年度に、南朝の都城であった建康城(南京市)と唐代揚州城(揚州市)、韓国は 12 年度に新羅の金城(慶州市)、百済の歴代の都城である漢城(ソウル)・熊津(公州市)・泗泚(扶余)、ソウルに残る朝鮮王朝の宮殿遺構や宗廟などを訪れた。

ベトナムは 13 年度に、ハノイに残る李朝の昇龍城、タインホア省の胡朝期のタインニャーホー(胡朝城)、フエにある阮朝期の都城遺跡とそれらの関連遺跡などを調査した。

これらの海外の現地調査では、都城の立地環境、基準線や山との関係、宗廟や南郊壇などの宗教施設を確認でき有意義であった。

なおベトナムでの調査成果は、2013 年 11 月 6 日に行った、古代学学術研究センター月例研究会で報告した。

(8) 研究会としては、奈良女子大学古代学学術研究センターが毎年開催している都城制研究集会(シンポジウム)を 3 度共催した。

2012 年 2 月 5 日(日) 於奈良女子大学

「古代都城をめぐる信仰形態」

都城と仏教・神祇信仰・天の思想など、信仰の諸形態との関わりを、中国や平泉も視野に入れながら検討した。

館野和己「古代都城をめぐる信仰の諸形態 - 問題提起として - 」

古市晃(神戸大学)「古代宮都と仏教信仰」
積山洋(大阪歴史博物館)

「難波京をめぐる宗教環境」

村元健一(大阪市博物館協会)

「中国 北朝都城の祭祀空間」

榎村寛之(斎宮歴史博物館)

「古代都城と神祇祭祀」

西本昌弘(関西大学)

「古代都城と神・仏・天の祀り」

前川佳代(奈良女子大学)

「平泉の宗教施設と風水思想」

鈴木明子(奈良女子大学)

「古代都城と神の祭り」

この成果は、古代学学術研究センター『都城制研究』7(2013 年)に掲載した。

2013 年 2 月 16 日(土) 於奈良女子大学

「古代都城と寺社」

1)のシンポの成果を受けて、都城と仏教・神祇信仰との関係を、各都城遺跡における発掘調査の成果を踏まえて議論した。

館野和己「古代都城と寺社の関係 - 問題提起として - 」

谷崎仁美(大阪文化財研究所)

「難波における古代寺院造営」

葛野泰樹(滋賀県文化財保護協会)

「大津宮と寺社」

森下恵介(奈良市埋蔵文化財調査センター)「平城京における大安寺」

中川由莉(奈良女子大学 博士研究員)

「平城京と寺院」

古閑正浩(大山崎町教委)「長岡京と寺社」

網伸也(京都市埋蔵文化財研究所)

「平安京と寺社」

松川博一(九州歴史博物館)

「大宰府と寺社」

この成果は、古代学学術研究センター『都城制研究』8(2014 年)に掲載した。

2013 年 12 月 15 日(日) 於奈良女子大学

「東アジア古代都城の立地環境」

日本・中国・朝鮮諸国・ベトナムを対象に、都城選地の具体的要素となった立地環境と、その思想的意味を検討した。

館野和己「日本都城の環境と思想」

出田和久「藤原京・平城京の立地環境」

村元健一(大阪歴史博物館)

「難波宮の立地環境」

齊東方(北京大学考古文博学院)

「中国都城の立地環境」

妹尾達彦(中央大学)

「中国三都の立地環境 - 建康・長安・洛陽の自然と社会 - 」

上野邦一(奈良女子大学)

「ベトナム昇竜城の立地環境」

李炳鎬(韓国国立中央博物館)

「韓国古代都城の立地環境 - 高句麗と百済を中心に - 」

山田隆文(奈良県地域振興部)

「新羅都城の立地環境」

この成果は、古代学学術研究センター『都城制研究』9に掲載予定。

その他に次の研究会も、古代学学術研究センターと共催して行った。

2012 年 10 月 5 日 於奈良女子大学

和田萃(京都教育大名誉教授)

「山との山々と飛鳥・藤原・平城京」

(9) 国内外の現地調査の実施や研究会の開

催などにあたっては、これまで築いてきた、国内外の発掘調査機関・文化財研究機関・大学等の機関に属する研究者との連携を生かすことができ、効率的な調査と最新の研究成果・発掘調査情報の収集などが可能となった。

(10) 3年間の研究の成果を示す、300頁からなる報告書を作成した。内容は資料編と論考編に分かれ、資料編は(1)で述べた『万葉集』の山岳・河川関係歌集成、『日本書紀』『続日本紀』の環境関係記事、『日本霊異記』に見える動物、それに『延喜式』関係では、奈良盆地の式内社一覧(但し掲載は大社に限定)と諸国貢進物一覧からなる。論考編には研究期間中に発表した関係論文6本を収録した。そしてまたGISを用いて、飛鳥浄御原宮からの眺望を復元した図を掲載した。

以上のような成果は、古代都城・都市研究にとって環境という視点が有効なものであることを明らかにし、今後の研究進展の1つの基礎をなすものである。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 12件)

- 1 舘野和己「古代都城と寺社の関係」『都城制研究』奈良女子大学古代学学術研究センター 査読無し 8 2014 1 - 14
- 2 野曾原吉彦・豊田新・高田将志・島田愛子・吉田真徳「現河床堆積物に含まれる石英のESR信号特性 - 木津川流域を対象として - 」Advances in ESR Applications 査読有り 30 2014 pp.4 - 11 .
- 3 奥村和美「萬葉後期の翻訳語 正倉院文書を通して」『叙説』奈良女子大学文学部日本アジア言語文化学会 査読無し 40 2013 pp.17 - 32
- 4 舘野和己「古代都城をめぐる信仰の諸形態」『都城制研究』奈良女子大学古代学学術研究センター 査読無し 7 2013 pp. 1 - 10頁
- 5 舘野和己「平城京内の固有地名 - その予察的検討 - 」『古代学』奈良女子大学古代学学術研究センター 査読有り 5 2013 pp.14 - 25
- 6 高田将志「南六条北ミノ遺跡の堆積層とOSL年代」『奈良県遺跡調査概報2011年度(第2分冊)』所収「大和郡山市 南六条北ミノ遺跡」橿原考古学研究所 査読無し 2012 p15
- 7 出田和久「近世村落景観の復原 村絵図と地籍図から景観の変化を考える」海老澤衷・服部英雄・飯沼賢司編『アジア遊学(重要文化的景観への道 - エコ・サイトミュ - ジアム田染荘)』 査読無し 153 2012 pp.113 - 125
- 8 穴戸良美「平城京の諸国本貫者 その在京形態と浮浪化」『日本歴史』 査読有り 767 2012 pp.1 - 17
- 9 舘野和己「宮都の廃絶とその後」『都城制研究』奈良女子大学古代学学術研究センター 査読無し 6 2012 pp. 1 - 12
- 10 奥村和美「『萬葉集』に詠まれた古都」同上書 査読無し pp.111 - 120
- 11 出田和久「歴史地理学における絵図資料とフィールド調査」『月刊地球』 査読無し 33-11 2011 pp.673 - 680
- 12 高田将志「八条北遺跡の堆積層と降下テフラ起源物質」『奈良県遺跡調査概報2010年度(第2分冊)』所収「天理市・大和郡山市八条北遺跡(三ノ坪地区・大和郡山ジャンクションF地区)」橿原考古学研究所 査読無し 2011 pp.83 - 94

[学会発表](計 21件)

- 1 三宅由香・前田俊雄・伯耆晶子・高田将志：「平城京左京五条五坊二坪遺跡から得られた珪藻化石群集」日本珪藻学会第35回大会 2014年4月26日 於名古屋大学
- 2 舘野和己「日本都城の環境と思想」第8回都城制研究集会 国際シンポジウム「東アジア古代都城の立地環境」奈良女子大学古代学学術研究センター主催・本科研グループ共催 2013年12月15日 於奈良女子大学
- 3 出田和久「藤原京・平城京の立地環境」同上
- 4 奥村和美「萬葉集の中の神話」奈良女子大学文学部なら学プロジェクト(なら学東京講座) 2014年2月11日 於奈良まほろば館
- 5 Y.Nosohara, S.Toyoda, M.Takada, A.Shimada, Y.Masanori Signatures of ESR signals and TL observed in quartz of Kizu river sediments and in host rocks. American Geophysical Union, Fall Meeting 2013, December 2013, San Fransisco.
- 6 宮崎良美「藤原京遺構データベースの構築」第19回公開シンポジウム「人文科学とデータベース」2013年11月30日 於立命館大学
- 7 上野邦一・舘野和己・出田和久「ベトナム都城遺跡の調査報告」古代学学術研究センター月例研究会 2013年11月6日 於奈良女子大学
- 8 舘野和己「古代都城と寺社の関係 - 問題提起として」第7回都城制研究集会「古代都城と寺社」奈良女子大学古代学学術研究センター主催・本科研グループ共催 2013年2月16日 於奈良女子大学
- 9 宮崎良美「古代を中心とした歴史地理データベースの試み」人文系データベース協議会 第18回公開シンポジウム「人文科学とデータベース」2012年12月22日 於大阪電気通信大学寝屋川キャンパス
- 10 舘野和己「遷都前後の歴史環境 - 平城京を中心に - 」向日市市民考古学講座

- 2012年11月1日 於向日市文化資料館
- 11 宍戸香美「9世紀の京職財政について - 職写田に関する検討を中心に」
奈良女子大学古代学学術研究センター研究会 2012年10月25日 於奈良女子大学
 - 12 出田和久・石崎研二「歴史地理データベースの構築(1) - 考古資料及び条里を中心に -」
日本地理学会地図・絵図資料の歴史GIS研究グループ」研究集会
2012年10月7日 於神戸大学
 - 13 宮崎良美「歴史地理データベースの構築 - 荘園絵図の利用を中心に」
日本地理学会「地図・絵図資料の歴史GIS研究グループ」研究集会
2012年10月7日 於神戸大学 招待講演
 - 14 奥村和美「仙女のおもかげ 萬葉集と遊仙窟」
奈良女子大学文学部公開講座
2012年7月15日 於奈良女子大学
 - 15 舘野和己「古代都城をめぐる信仰の諸形態」
第6回都城制研究集会「古代都城をめぐる信仰形態」
奈良女子大学古代学学術研究センター主催・本科研グループ共催
2012年2月5日 於奈良女子大学
 - 16 高田将志「奈良盆地飛鳥京における堆積層のOSL年代」(ポスター発表)
第28回ESR応用計測研究会・2011年度ルミネッセンス年代測定研究会
2011年12月1~2日
於京都大学地球熱学研究施設(別府市)
 - 17 中村泰之・宮路淳子「纏向遺跡(奈良県桜井市)の古墳時代前期の土坑遺構より出土したカエル類遺存体について」
日本爬虫両棲類学会第50回記念大会
2011年10月8日 於京都大学
 - 18 河原一樹・中沢隆・宮路淳子他
「MALDI-MSによる古代試料中の絹の同定」
(ポスター発表) 第84回日本生化学会大会
2011年9月22日
於国立京都国際会館
 - 19 河原一樹・中沢隆・宮路淳子他
「質量分析による牽牛子塚古墳出土夾紵棺断片中の絹の確認」
第28回文化財科学会
2011年6月11日 於筑波大学
 - 20 河原一樹・中沢隆・宮路淳子他
Identification of Animal Species by the MALDI-MS of Collagen in Animal Glues of Chinese Ink Sticks
ASMS(米国質量分析学会)
2011年6月8日 於米・デンバー
 - 21 高田将志「含水比との関係でみたOSL年代測定値 - 日本列島で採取された堆積物試料を例に -」
2011年度地球惑星科学連合大会
2011年5月25日 於幕張メッセ

〔図書〕(計 7件)

- 1 舘野和己『古代都城・都市をめぐる環境論』
(平成23~25年度 科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書) 2014 300
- 2 高田将志・山田誠「春日山原始林とその周辺の地形・地質」(共著)

- 前迫ゆり編『世界遺産 春日山原始林』
ナカニシヤ出版 2013
292 (pp.100 - 109)
- 3 舘野和己「日本古代の震災記事」(共著)
三野博司編『奈良女子大学文学部<まほろば>叢書 大学の現場で震災を考える』
かもがわ出版 2012 95 (pp.68 - 76)
 - 4 石崎研二「明治期の奈良盆地における集落の中心性」(共著)
HGIS研究協議会編『歴史GISの地平』
勉誠出版 2012
288 (pp.159 - 170)
 - 5 出田和久「奈良盆地歴史地理データベースの構築とその利用」(共著)
同上書
288 (pp.197 - 207)
 - 6 宮路淳子「古墳時代の動物利用」(共著)
一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編『古墳時代の考古学 8』
同成社 2012
242 (pp.156 - 172)
 - 7 奥村和美「家持の「立山賦」と池主の「敬和」について」(共著)
稲岡耕二監修、神野志隆光・芳賀紀雄編『萬葉集研究 32』
塙書房 2011 272 (pp.163 - 197)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

舘野 和己 (TATENNO, Kazumi)
奈良女子大学・研究院人文科学系・教授
研究者番号: 70171725

(2) 研究分担者

出田 和久 (IDETA, Kazuhisa)
奈良女子大学・研究院人文科学系・教授
研究者番号: 40128335

石崎 研二 (ISHIZAKI, Kenji)
奈良女子大学・研究院人文科学系・准教授
研究者番号: 10281239

奥村 和美 (OKUMURA, Kazumi)
奈良女子大学・研究院人文科学系・准教授
研究者番号: 80329903

宮路 淳子 (MIYAJI, Atsuko)
奈良女子大学・研究院人文科学系・准教授
研究者番号: 30403322

(3) 連携研究者

高田 将志 (TAKADA, Masashi)
奈良女子大学・研究院人文科学系・教授
研究者番号: 60273827

宮崎 良美 (MIYAZAKI, Yoshimi)
奈良女子大学・古代学学術研究センター・
特任助教
研究者番号: 00612334

宍戸 香美 (SHISHIDO, Yoshimi)
(2012年度のみ)
奈良女子大学・博士研究員(当時)
研究者番号: 00637861